

## 後腹膜神経内分泌腫瘍の1切除例(腹膜・後腹膜2)

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 藤本 大裕, 田口 誠一, 足立 巖, 飯田 茂穂, 中川 原 儀三, 原田 憲一                                     |
| 雑誌名 | 日本消化器外科学会雑誌   |
| 巻   | 37  |
| 号   | 7   |
| ページ | 1186-1186   |
| 発行年 | 2004-07-01  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2297/3962">http://hdl.handle.net/2297/3962</a> |

**PPB-1-060 後腹膜神経内分泌腫瘍の1切除例**

藤本大裕<sup>1)</sup>, 田口誠一<sup>1)</sup>, 足立 巖<sup>1)</sup>, 飯田茂穂<sup>1)</sup>, 中川原儀三<sup>1)</sup>,  
原田憲一<sup>2)</sup>

(市立敦賀病院外科<sup>1)</sup>, 金沢大学大学院医学部形態機能病理学教室<sup>2)</sup>)

神経内分泌腫瘍は消化管が好発部位で、後腹膜原発は非常に稀である。我々は後腹膜原発の神経内分泌腫瘍の1切除例を経験したので報告する。患者は59歳、女性。H13年深部静脈血栓、肺梗塞で内科入院中腹部CTで後腹膜腫瘍を認めた。以後経過観察されていたが、H15年腹部CTで腫瘍のsize upを認めたので当科紹介となった。腹部CT、MRCPで膵頭部、十二指腸下降脚の背側におよそ5cmの腫瘍を認め、上部、下部内視鏡検査においては病変は認めなかった。以上より後腹膜腫瘍と診断した。腫瘍は十二指腸下行脚から膵頭部の背側で、下大静脈の上に乗っかるように存在していたが、周囲臓器への浸潤は認めなかった。腫瘍細胞は索状もしくは腺房状の細胞配列を示していた。病理組織特殊染色所見では神経系マーカーNSE染色陽性であり、内分泌マーカーchromogranin A染色においても陽性であった。細胞増殖マーカーKi-67の細胞陽性率は極めて低かった。特殊染色の結果及び、組織形態より良性の神経内分泌腫瘍と診断した。後腹膜原発神経内分泌腫瘍は自件例を含め4例目であった。自件例では良性と診断したが腫瘍径が5cmと大きく、悪性化の可能性もあるので慎重な経過観察が必要と考える。